

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物
行(通第二九四号)

(通第二九四号)

慈光

第二十五卷

第十一号

次

ただ念佛して……池山栄吉……(1)	ただ念佛して……池山栄吉……(1)
信仰書簡……近角常音……(5)	信仰書簡……近角常音……(5)
二つの親鸞聖人像……千葉乗隆……(14)	二つの親鸞聖人像……千葉乗隆……(14)
念佛詩抄……木村無相……(17)	念佛詩抄……木村無相……(17)
「たてまえ」と「ほんね」……花田正夫……(20)	「たてまえ」と「ほんね」……花田正夫……(20)

ただ念佛し

池山栄吉

“ただ念佛して”という言葉は、聖人のよき人の仰せにきいたときわみであり、信の告白としてのかなめであり、また人に信をすすめるおくのである。この言葉を信への手引として受入れた人は、数限りもないであろう。私などもその一人である。この言葉に引込まれて、じやあ私もと急にまねる気になつて断然声に出したのが、あこがれの信界への踏切であった。

今日我國では、津々浦々にいたるまで、念佛の声の響きわたっていらない処はない。日本人であつてこの声を或は口にし、或は耳にした覚えのないものは、おさな児を除いては一人もあるまい。さすが大乗相應の日域（にちいき）、こうあるのに不思議はないが、他面、宇宙一切の事物は、そのはてしなき流転の相のうちに、鐘の音さえ諸行無常とひびかせて、遠く近く、裏に表に、人生の最大緊急の問題たゞまことなる念佛への関心をそそらぬものはない。

そもそも念佛は、救いのためにあらわれた力の、その目指すものへの呼びかけである。それをそれとも知らないでうつかり聞きながす人のあまりにも多きに過ぎるのは、まことに歎かわしい限りであるが、考えて見れば、億劫にももう遺いがたい弘誓の強縁であるから、また怪しむべきではなく、むしろただ聞いたというだけでも、その人とかの力をつなぐえにしの糸は、はやくも用意されたものとみなされるのを多とすべきではなかろうか。進んで念佛の意味を聞いたり、考えたり、とにかく口にしたりする段になつては、もう糸の端と端とがある交叉状態になつて動きつつあるのである。が、それがしつかり結びあげられるまでは、遅かれ速かれ、若干の時を要するのが常で、その間には、深浅、強弱、方向の正否などの視点から、いろいろの段階が認められ、さまざまの転化が行われる。

が、その中で、念佛のいわれを聞くことは聞いても、そ

れについて多少の考慮を払つてゐるというだけで、まだ実際念佛するという程にたち至っていない一類と、念佛にある価値を認めて、とにかく念佛しつつある一類とでは、最後の目標のへだたりから見て、龜と兔の馳けくらべ、必ずしもどちらが先に行きつくとも限らないが、前者の前途なお遼遠なのにくらべると、後者の地点からはもう山が見えている。念佛の出る出ないをさかいとして、前者は單に素見（すけん）の客であるのに反して、後者はすでに謂わば力との直接交渉の圈内に立ち入つたものと見られる。

力との直接交渉は念佛を通して行われる。その進捗の程度にも、見方によつては矢張り幾多の段階があり、転化もあるが、特に際立つたそれの三つがある。念佛を目的達成の一助と見るのがその一で、目的達成への努力の集点とするのがその二。

念佛も棄てたものでないとか、念佛も結構役に立つとか念佛は他の何物にも劣らないとか、さては念佛にかぎるとか、それぞれの思惑（おもわく）に動機づけられて、おのがじし、応分の力を特ち出して念佛に精進すると、その効果は争えないもの、多かれ少なかれ或る法悦が感じられる。が、困つたことには、いつも柳の下に泥鰌がいるとは限

念佛の一行にさえおよびがたい身であると知れては、地獄一定はまぬかれない数と、焦燥の五里霧中に彷徨して、むなしく指南の法輪を翫望（ぎようぼう）する折から、幸に宿善開発の時節到来、今までに覚えない響きを念佛に聞きとつて、念佛は、救わんとする力から、力なきものへの呼びかけで、念佛する人から見れば、ただそれにうけ答えをするまでのもの、つまり力そのものの發動のほか何でもないと心証する。これが転化のその三である。

念佛は余計なものとして作られたものではない。なくてはならぬものである。と同時に、他の何物をもつても代えることの出来ないもの、従つて単獨行動は念佛本来の性分

で、念仏と外のものとの共傷を策するのは、この絶対性への反逆であり、冒瀆である。

念仏はただ惜しみなく奪うものの上にのみ、あまねくその全分を光被する。その一、その二の念仏が、とかく坐りが悪かったのに、その三にいたって、にわかにびつたりおさまりがつくというのも、畢竟このゆえである。

念仏を聞き初めてから、惜しみなく奪い終るまで、意識にのぼるにせよ、のぼらぬにせよ、それからそれと常不斷の過程をたどつてやまない幾多の生成稚移は、箇々の事象から見れば、或は桐一葉、或はいと子の死、さては空中の声、縁の下の聴聞など、千差万別、それぞれの機縁に由来するが、その原動の源にさかのぼれば、一に力のもよおしにかかるとうなづかされる理由がある。

念仏は自動する。念仏は自省をうながし、自省は念仏の意義を深める。一方念仏の意義がいよいよ深く信知されたがつて、他方ますます深く自己の何たるかが認識される。信知の深まりと自省の深まり、両者は相関的に歩きかけて、交互に促進をきそいあう。が、その実一つ楯の両面と云うべきもの、結局帰命の一念に抱擁する傾向に歩くのである。落着くところへ落着かせる。からくりの妙ただだ不思議とあきれるのはかはない。

或るルツター研究者の説によると、ルツターも亦その信の確立には随分苦労したものである。神を信じようとして信じ得ぬなやみ、これはルツターに取つて、極重の罪惡としての自覺であった。神の有無を疑つたのではない。神に近づき親しむ気になれなかつたのである。それはそのはずルツターの心鏡に映じた神は、我々が觀音菩薩を見るような、春風駘蕩（たいとう）のなごやかさは氣振りにも見えず、秋霜烈日、閻魔大王のようなすさまじい相好の持主で外に瞋讐の焰を現じているばかりか、内にもなさけ容赦も荒々しさを懷いているしか思えない。こうした神を信ぜよとは、光秀にむかって飽くまで信長に信頼せよと強いるのである。この無理な注文、出来ない相談をもちかけるというも自重、ややともするともたげようとする抵抗の頭をみずから押えて、渾身の勇を鼓しつつ、我等の父たる神の肯定をめがけて精進したのが、ルツターの求道の過程で、悪戦苦闘のはて、精も根もつきて到頭我を折つて参つてしまつた

念仏は招（まね）く／＼一心正念にして直ちに来れ」と。念仏の心意気がよくこの言葉にあらわれている。今これを放浪の旅を続ける一人子の帰りを、あるさと待ちわびる母の心に引き合わすことを許されるならば、直ちに来れをスグキテオクレヨと訓じ、一心正念にオネガヒダカラと仮名を振つても、そう見当ははずれていまいと思う。

オネガヒダカラスグキテオクレヨ、この哀々惻々（あいそくそく）の表情が、相手の心に滲透し、感銘した極促が、やがてそのまま内から滲み出る切々の帰心ともなり／＼念仏まうさんと思いつこころ／＼ともなるのであって、この心境の変化こそは、力とその目的物との間に、二度と解ける気遣いのない鞏固な結びを仕上げるのである。

このあらたなる心境のたたえる雰囲気は／＼たのもしさ／＼をその基調とする。／＼たのもしさ／＼は、称えるものの心にのこる余韻であつて、一度キヤッチ得たら占めたもの、隨時、随所に再現して立消えに帰するおそれのないのがその特徴である。

もとより人生の行路、愛欲名利の噪音の高まれば高まる程、冴えかえる念仏の中に、いよいよつのる／＼たのもしさ／＼は念仏する者に絶えず繰りかえざれる体験である。

この立場から／＼神を知つたと思つていた私は、神を知つところが、即ち、信の成立となつたのであつたが、それも一度こつきりでけりがついたというのではない。その後もときどき抵抗の風、否定の浪が盛り返してくるたびごと、同様の奪鬪が繰りかえされなければならなかつたということである。

こんな話を聞くにつけても、しのばれるのは、念仏といふもののあることのありがたさである。もし念仏というものがなかつたなら、私達も恐らくこれと似たような動搖の悩みを反復しなければならないであろう。

それなしには生きられぬ、たのもしさを伴れる念仏、／＼もうさんとおもいたつこころ／＼をきつかけに、念仏とはくれる氣づかいのない／＼たのもしさ／＼わが意気込みの強さでつかまえて離さないのでない。たのまれる力の方から絶えず供給してやまない念仏。

聖人は私をこの念仏にひきあわせて下さつた。筆に口にあらゆる方面から念仏の奥義を開闢（かいせん）して、鈍感な私にも、多少の／＼たのもしさ／＼を味得させて下さつたほんに私にとって聖人は、空前にして絶後なる／＼無碍の一道／＼への最大一の案内者である。『仮と人』より

信仰書

簡

近角常音

前略
御見捨てなき大慈大悲なることは我等が如何なる方法をもつても、どうしようもなき者なるが為なれば、信仰上から申して、実際問題に処して別段変った道があるわけでは御座なく、やはり世間と同じように、雨降れば傘はささねばならず、病あれば薬をむだけの事にて、さりながら何程服薬しても果して如何になりゆくやら、全く取り止めなき人生に、そのとりとめなきを哀れみて、とりとめなき限り捨てぬとの思いがけない人の大慈大悲に遇いまいらせたるだけが我等の在にこれあり、しかして、それはとりとめなき限り何處までも捨てずとの大悲にて候えば、唯このお見捨てなきお慈悲を仰いで、結果の善惡をかえり見す、否、悪く行つたら行つたで、お見捨てなきを信じて、思うが如く決行する、この外にないよう存ぜられ候。

小生は何時も申す如く、聖人、教行信証の総序文の導きによりて、阿闍世王、王舍城悲劇のお示しを渴仰致し居る

者にこれあり、頻婆沙羅王（ひんぱしやらおう）韋提希夫人は、あれは平素仏の教えを聞きながらついに家庭問題を惹起（じやっき）して大混乱におちこんでしまったといふこと、宿業の催すところ、如何にも我等の有様を見そなわして下されたの善巧といたぎ申し候。
しかしてその結果、韋提は獄中に幽閉せられてはじめて自己の姿に行きつまつて如來大悲の救済を仰ぎ、ここに世尊は王宮に降臨して、韋提のために如來大悲の真心を開闡（かいせん）して下され、お慈悲に接してはじめて韋提が救いをこうむつたということ、小生はここで何時も、韋提は獄中より出られて救済を得たものなく、身は獄中にありながらお見捨てなき念佛（むしょうにん）をえたものという事を力説致し居り候。

もし實際問題がうまく行つて救われるということならばここは獄中より放たれて救われたということでなければ筋が合ひ申さず、然るに身は獄中でありながら哀れみ給う御

真実だけにて救うていただかれ、しかるにそれは何處までもお見捨てなき御慈悲の故にいつの間にか広大の御加護にて獄中より解脱をえて、ついに不幸児、阿闍世王の、仏のみ許に出かける手引きをせらるるに至つたということ、これは韋提の小細工で開けた仕合せでなく、全く大悲加護の自然の徳益なるべしと存し居る次第に候。

全体この韋提の得忍（とくにん）の事件を小生のふかく渴仰致し居る次第は御承知の如く総序文のお示しには、直々（じきしき）この事實を承けて
「かるが故に知んぬ、円触至徳の嘉号は惡を転じて徳をなすの正智」
と仰せられてあり、円触至徳の嘉号は念仏一道なることは申すまでもなく、惡を転じての惡は、王舍城の家庭事件なることはこれまた申すまでも御座なく、しかして、徳を成す、の徳ははじめて韋提が人生を捨てて本願一つに帰入させていただいた味わいと諒解せられ、ここを小生はいつも円触至徳の嘉号だけが惡を転じて徳を成すの正智とお話したし候。

誠にいらざることを書き立て候えども小生の申し上げた

かつた要点は、我等の紛糾せる實際問題は結局これをもととして韋提希の如く、広大の御慈悲に到らせて貰う外になく、（これは人生的に解決を与える道理はないとの意

味）、しかしてその不思議の御真実は、我等の罪業を何處までも矜哀（こうあい）まします慈悲なれば、そのお慈悲一つを仰がせていただけば韋提、阿闍世の如くあるべからざる不思議の如來廻向の解決を与へらるるが我等の信仰上の解決の有様なりとのことを申し上げたかったものと思召し下されたく、即ちこの点より申せば、どれ程悪行（わるゆき）しておろうが、どれ程悪化して居ろうが大悲不思議の御回向の前には問題にならぬわけにて、少々ぐらいの善惡は何等意に介し給うことないのではないかと申上げたかったものと思召し下されたく、その代りそれを人間の小細工でああこうと申したところが、そんなことでうまくゆくと思わぬとの意味にて候。

これ小生が從来より一々の問題につきああこうと申し上げるをさしひかえていた所以（ゆえん）にこれあり、なおこの話は尊台様、今春御上京いよいよ御帰國の最後の日曜講話の際申し上げて居つた話にこれあり、御記憶下さるや否やと存じ居り候。

何やら夜おそくなりうまいこと申せなかつた次第に候えども、何卒小生のこの話はよくよく味つて頃きたくお願ひ申し上げ候。もっと申したく候えども少し疲れ候間、これにて擱筆致すべく候云々。

仙

八

いじお煙草か、身先のひき手る火薬同様に頗るひきあつた
難易のあらじことを書ち立ててゐる。その中つて何ぞ
「ひき」せる火薬二種。

『歎異抄』第二章に「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」このよき人といふことと、これは本抄の序文に「幸に有縁の知識によらずんば、いかでか易行の一門に入ることを得んや」とあります。

「有縁の知識によらずんば」——これは大変なことであります。

葉でないか「どうもしないのはどうなつた」わけですね自分が来たのには違ひないけれども、遠い宿縁があつて、それに引かれてくる。してみれば、八百年前御生誕の聖人のお言葉を聞こうとするのは、私共の知恵で聞こうとするのではなく、お淨土からのおつかいである聖人の、所謂加

放つたらかしてきて、ようやく永いお育てを蒙ってやつと
お念佛申す心をおこして下さったので、私の寺にお詣りに
なる皆様の姿を見て、あれが私の姿であると知られます
「よき人の仰せをこうむる」—私等は聖人の仰せで本当
の命を見出させて頃きましたが、その道に現実に導き入れ
て下さったのは池山先生でありました。先生が『歎異抄』
第二章の「親鸞におきては」とあるのを「池山におきて
は」と読まれ、又「よき人」とあるのを「親鸞聖人」と仰
がれて「池山におきてはただ念佛して弥陀にたすけられま
いらすべしと親鸞聖人の仰せをこうむる」と念佛に帰せら
れた、その先生に導かれて、お念佛一つで私は心のすわり
ができたのです。

この「よき人の仰せ」というのをひらたい言葉で云いますと、帰依三宝であります。「自ら仏に帰依したてまつる」自ら法に帰依したてまつる、「自ら僧に帰依したてまつる」云うてみれば「よき人」であります。そのよき人を通してまつる真実——仏に帰依することが最初にてできます。二番目に法に帰依し、最後に、仏と法を喜ぶ人、所謂僧、そういう集りに帰依する。これは語呂がよいので仏、法、僧と順に並べたのではないであります。

来のおはからいによつてここまで來たのです。罪惡深重。
煩惱熾盛と言われる私のはからいで行くところであれば、
仲々聞法などに出ることは、こればっちもありません。本
当に「遠く宿縁を慶べ」というお言葉をつくづく思つるので
あります。

『教行信証』に聖人が「遠く宿縁を慶べ、もしまだこの
たび疑網に覆蔽せられなばかえりてまた曠劫を逕歷せん」
と仰せられておりますように「よき人」のお育てにより、
遠く深いおはからいによつて、私等が、念佛申さんとおも
ふにつぶがる所以であります。

私は黄檗禪の寺におりますが、日曜土曜ともなると沢山の観光客がやって来ます。本堂の前を素通りする若いカップル、中を見きこむ者もいますし、なかにはパンパン拍手を打つ人、この神様は何が祭ってあるのですかと若い人が聞くこともあります。色々の人々が来ますが、しかし「遠く宿縁を慶べ」—考えてみますと、私も何世代もお念仏を

あります。何々主義といふのは、所謂仏といふ人格に帰依しておるのであります。人を通さずに、眞実といふ法に直接帰依するのであります。さて眞実の法、つまり仏法でいう「まこと」ですが、これは法に直接ぶつかってもそれは私の中に入つてこないので、たとえ入りましても、ということだという一つの理解にしか過ぎないので、「まこと」というものは「まこと」を体得した人に、所謂仏に帰依して初めて「まこと」というものが人格を通して、私のものになつてくるのです。「法は人によつて伝わる」とも、「道ありと信じ得道の人を信せず、これ信不具足」と詛められるところであります。

雪を見る者はこれを「白い」と言う。見るだけなら雪は白く映る、頭で理解すると雪は白いとしか見えない。ところがこれに触れる者は「冷たし」と言う。さわってみると「白い」という理解でなしに「冷たい」という実感によって私の命に感じてくるのです。そのように私共は、人を通して、仏を通して初めて「まこと」が単なる理解ではなく体解されてくる。親鸞聖人が仰せられる通り「よき人の仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の「よき人」にふれて初めて私共は眞實に、本当の命を身に通わせて頃くことが出来るのであります。

ますと、相手が人格（仏）でありますから、こちらの方が

ゆつたりとして、色々の悩みごと、心の凝りかたまりも、すっかりもみほぐされて、南無阿弥陀仏、々々々々と心のすわりがつくようになる。

ほんとうにそこに「弥陀の誓願不思議にたすけられまい」として、「私共のはからい、理解を否定されて、人格そのもの、弥陀のお誓いにたすけられてゆく、人格そのものに結ばれていくて、私共は本当のものに会うことが出来るのであります。

「よき人」ということについて同じようなことを道元禪師が『学道用心集』に「それ仏道を学ぶに初め門に入るの時、知識の教を聞いて、教の如く修行す。この時知るべき事あり。法我を転じ、我法を転するなり」—教を聞いて、教のように行してゆく、この時よく分つておかなればならぬことがある。それはよき人の仰せを聞く場合に、法一まことが私をひるがえして下さること、私が法をひるがえすことと、二つの道がある。そして更に、「我能く法を転ずるの時、私は強く法は弱し。法かえって我を転するの時、法は強く我は弱し」—私が法をわがものにする、先程言うように、よき人を通さずに法に直接ぶつかつて法をわがものにして転ずる時には、われは強くて法は弱くなつてしまふのである。法がわれを転するとき、法は強く我は

出られて、子供の白隱に袖から一つの鏡を出して「これをお前にあげます」と云われた。それはピカピカ光つたよく映る真白い鏡でしたが、もう片方の袖から出されたのは真黒で何も映らない鏡でした。「この鏡もお前に」と白い鏡と黒い鏡を夢の中でお母さんから頂かれました。
その時、真白い鏡を見た時、お母さんは私の悟りの境地を知つて下さつていてと思つたが、真黒いのを渡された時、ハツと一時とまどつたと書いてあります。しばらくして、そうであつたかと、二十四才でお氣付きたになつた禪師が五十になつてはじめて「どうもしようのない私」という方面のことをとり忘れていたとお気づきになりました。法然上人の言葉に「松かげの暗きは月の光かな」—本当にそうですね。私共が本当に罪惡深重、煩惱熾盛、いざれの行も及び難き身なればとても地獄は一定すみかぞかしとこのようく知らせて頂くのは私共の力ではそこまでゆけません。如來のお慈悲の光に照らされて始めて氣付かせて頂けるのであります。

警えてみると、夜の道を自分のはからいで、自分の智慧という提灯をつけて、あそこに小さな石、ここには大きい石、あそこで光っているのは平なところであるうと思って行くと、平に光っているのは水溜りだったと失敗します。あれはよい、これは得だ、あれは損じやとやつて行くと、

弱し、と同じことを道元禪師も言つておられます。よき人、善知識の前へ行つて教を尋ねる時でも、私が眞実をつかまえてわがものにする時には、自分というものが上になつて、おまことというものが下になつて弱くなつてしまふ。もう一つは、おまことが強くなつて私の方が弱くなつてしまふ。こういう二つの大事なことがあるぞと仰言つています。

禪の言葉に「大円鏡光、黒きこと漆（うるし）の如し」とあります。如來様のお光りは金びかぢやない。本当は真黒に光つてござる。こういうところが禪の鋭い表現であります。さて「仏と人」ということで「機法一体」ということを話したいであります。我々の本当の姿、つまり真黒けのしようのない姿を知らせて頂くのは、如來の智慧と慈悲によつてのみ出来るので、私が私の力では全く何も出来ないのだと申し上げたいであります。

二百五十年前、白隱禪師が出られましたが、二十四才で禪道で一つのさとりが得られまして非常に喜ばれたのですが、五十の時、はじめてお母さんの夢をみられ、その時「しじうもない私」という方面のことを取り忘れておつたわいな」とお気付きになりました。それは、お母さんが夢になれるのであります。

やりそこない、見当違いの連続です。それが東に太陽が出ると、自分の提灯で見た景色とはかわって、もつと明細に水は水、石は石とすつかり照らし出して下さる、罪惡深重、煩惱熾盛の衆生とチヤンと照らし出して下さる。

ところが「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらずべし……いづれの行もおよび難き身なれば」と、自分のすつかり駄目な姿が、如來様のお教えによつて氣づかせて頂いた時にはじめて「地獄は一定すみかぞかし」と、そこに落ち着つきが出来る。落ち着きが出来るといふことは、如來の光りに照されて、我が身のすつかり全部が明らかに受け取つて頂いたからこそ「住みかぞかし」となれるのであります。

親鸞聖人は、御自分のことを愚癡親鸞、愚と仰言つています。愚とはおろかということです。『教行信証』に「鈍」というは心のふき人なり」とあります。このところを気をつけて頂きたいのです。鈍というのは心の鈍いことであるというのが私共の理解ですが、聖人は鈍といふは心のふき人なり、と訓まれました。聖人は概念をもて遊ぶ人ではなく、何時でも人ととられる。命のかよた私のことと常にうけとられる。私共はああそいうことかと大方軽く頭で読みますが、聖人は身をもつて仏典をお読みになつた

「二河白道」の「汝一心正念にして直ちに来れ、われ能く汝を護らん」というのを御開山は『愚禿抄』に解釈して「能」の言は不堪（ふかん）に対するなり、疑心の人なりとある。出来るいということは、出来ないという不堪に対する言葉である。このように聖人は必ず対句に出しておられます。ですから、聖人は純粹にお念佛一つにまかされた姿の中にうつり出されるのは、あれだ。これだ、という五分五分対立した姿をいつでも沢山出しておられる。即ち自分の愚かさの姿が沢山出てくる。善知識といつても、真善知識、正善知識、惡善知識云々と『愚禿抄』の中で対句で沢山おのべになっています。

さて、われ能くと云う能は不堪に対するなりと、更にこそすなわち「疑心の人なり」といつてあります。「われ能く」というのは、本当に救いとげるぞというのは「疑つておる人」であると、ここでも疑心の人なりと云われます。このように聖人は常に事柄として扱わないで「親鸞においては」と命のかよつた自分の中に、如來の眞実のまことを頂いておられます。鈍と言うはこちらの鈍きひとなり」「能と言うは堪に対するなり、疑心の人なり」と両方ながら人というてあります。

有名な華嚴の鳳潭が親鸞聖人の『教行信証』を拝読して「こんな分らん書物はじめて読んだ」と言つたことは有名

なことです。それはそうですね、聖人が「慶しき哉、心を弘誓の仏地に樹て、念を難思の法海に流す」と言つていらっしゃるかと思うと「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑して定聚の数に入ることをよろこばず」とあります。仏教を概念的に統一して、そこに生きる道を見ようとする鳳潭には聖人の御述懐は絶対にわかりません、聖人の仰言る、慶しき哉、悲しき哉は両方ながら同じであります。

又聖人は「非僧非俗」と仰言つています。僧侶でもない、俗人か、俗人でもない。僧とは出家者であり、俗といふのは在家の人です。非僧非俗といわれるものは所謂出家とかいう相関的な五分五分の関係ではない。「禿」という禿とは、はげているということと、はげてているということは、俗人の毛の生えておる頭を剃つて坊さんになるというのではなく、元から生えることのない人のことを「禿」という。ですから頭を剃つて坊さんになるという標準のクラスの所で、聖人は「愚」とか「禿」とか仰言つているのではなくて、全然別個の立場、もつと深いところで「全然駄目な身」、「地獄は一定すみかぞかし」という世界を「禿」と仰言つてゐるのです。「これは絶対否定であります。近角常觀先生はこれは相対的否定でなく、絶対であるから、これは絶対肯定になつていくと言われています。

池山先生は、いつか「念佛者は無碍の一徳なり」という歎異抄の七章のことばを、満月にたとえられ「お月様きれいだなあ、あなたは本当に美しい」と讀えると、お月様は「いいえ、私はお日様の光りを反射しているだけですよ」と仰言るように「念佛者は無碍の一徳なり」と大上段に振りかぶつておられるその姿は、念佛者が威張つておるのでない、太陽の光、弥陀廻向の御名の故に光りが十方に照りかえすだけなんです。そうなんです、「親鸞は弟子一人も持たず」——あるのお声にも通じるもので。聖人の常の仰せ「弥陀五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とあります。が、この親鸞一人とあるのは、聖人一人がためだけで、私共のためではないといふのではないのです、その一人、煩惱具足の一人の中に一切私共衆生が含まれてゐるのです。「親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを」——お互にそうです。……人の愚かさ、ほんとうにお互の心の底は、どろどろした、得体のしれないものしか出てきません「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを」と氣付かして頂くのは、仏かねてしろしめして、遠い遠い十劫の昔から「榎原さん、心配するんじやないよ、みんなかぞかし」と、本当に駄目な身であります。それをそれと氣付かして頂くのは、仏かねてしろしめして、遠い遠い十劫の昔から「榎原さん、心配するんじやないよ、みんなかぞかし」と、本当に駄目な身であります。それをそ

な知つてゐるんだから」と、こうした私を呼びかけて下さる。これが「南無阿彌陀仏」であり、機法一体の南無阿彌陀仏であります。これは寄せて合体にするのではなくて、機は機、法は法、それがそのままでありながら一体であり、それをうけて仏凡一体、生仏不二と信嘗されるのであります。南無阿彌陀仏とは、たとえば木が生えておるけれどその根っこを下からかかえ上げて、幹から枝葉から、全部を抱えあげて、機法一体の南無阿彌陀仏と成就して下されである。云うてみれば、南無阿彌陀とは私と同じ高さであります。ここに如來は「榎原さん、心配するんじやないよ、私があるよ、いいかね」と常に仰言つて下さるのです。

私は、如來様は背中にいられるところ頃思うんです。私はあれだこれだと言うておりますが、そういう私にぴたり添うて、見えない如來様が時折り肩ごしに「私がいるよ、榎原さん、私がついているよ」と時折りこう云うて下さる。「仏かねてしろしめして」私は罪惡深重、煩惱熾盛の身、はからいだらけの煩惱の身にピツタリそりて、仏凡一体、生仏不二と機法一体の南無阿彌陀仏となつてあらわれて下さるのであります。法然上人の「松かげの暗きは月の光かな」と、親鸞聖人の「ひとえに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたす

けんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」の常の仰せを身にしみてありがたく渴仰しております。

昭和四八・六・一四。高倉会館講話。

紹介図書

親鸞聖人の聖徳太子奉讃　白井成允述

定価、五〇〇円。聖徳太子会刊行。

発売所、京都市下京区堀川通花屋町百華苑。

振替、京都二五七八八番。四八年八月刊行。

自序　私共日本民族に精神的自覚の道をお開き下された

のは聖徳太子であらせられました。「世間は虚偽なり、唯仏のみ是れ真なり」と告げたまゝ「南無仏」の「一仏乘」即ち是れであります。その一仏乗が眞に私共庶民の宗教となつたのは、太子から六百余年を経た鎌倉時代に親鸞聖人が現われたまゝに因ります。聖人は「南無阿弥陀仏」の「誓願一仏乘」を以てすべての道教を統べ、撰めつゝ告げられました。「煩惱具足の凡夫・火宅無常の世界はよろづのことみなもてそらごと、たはごと、まことあることなきに、ただ

念仏のみぞまことにておわします」と。六百年を隔てて前聖後聖その揆を一にするのは、眞実の法遠く相照らすもの、仰ぐべく信すべきであります。

わが民族の精神史上、聖徳太子を慕いまつることの深き親鸞聖人の如きは稀であります。太子の御精神が聖人の御教に由りて始めて明らかに私共の胸裡に浸み透つてくださるのであります。「親鸞聖人の聖徳太子奉讃」の御あとを見まつろうとしたのは、その消息を幾分か明らかにしたいと思つたからであります云々。

二つの親鸞聖人像

千葉乗隆著

松山市で開かれた本願寺秘宝展に、関係者の一人として出席した。愛媛新聞主催で松山の美術館が会場であった。一応、展観物の配置を終つて、ほつと一息ついて、あらためて会場入口に立つたとき、左側のケースに聖人の画像と右のケースに聖人の肖像がたまたまその対比が強く印象づけられた、そして奇しくも現代社会における二つの親鸞観をそこにまざまざみる思いがした。

右手の肖像は、鏡の御影によばれ、聖人の容貌を、当時の有名な肖像画家の榜殿が、毛端までも違わないよう、鏡にうつしたことく、たんねんに描いたと伝えられる。それはマユをピンとはねた、意志が強そうであるが、平凡な背の低い小男の像である。

ところが左手の画像は、柔軟でとりすました、いかにもありがたそうな、鏡の御影の人間親鸞とは全く対照的な神格化された像が描かれている。これは聖人の滅後二百十余年、本願寺第八世、蓮如上人が作らせた等身の御影といわ

れるものである。中興の蓮師時代に真宗は全国に信者が出来て大教団へと成長しその大教団の創始者として、本願寺の聖人親鸞として、教団の発展と共に、次第にその人間臭を取り去られた。

聖人はかねてより「非僧非俗の愚禿親鸞」と云われた。非僧非俗というのは、聖人は比叡山において二十年間にわたつて僧として修行をはげまれた。酒を飲んではいけない肉を食べてはいけない、異性をしたつてはならない。心に邪心をいだかないようにという戒行を守りぬこうとされた。しかし異性に心ひかれ、心に邪悪をいだかないではおれない自己を反省し、結局、自分は僧侶として落第であるという意識、それが非僧という言葉で表現された。また俗人としても、よくよくかえりみれば、社会倫理すら眞面目に実践できない自分で、あつたとの反省の上に、愚禿親鸞という慚愧があつた。そして念仏法難によつて北国流遁を機

「親鸞」　人間性の再發見　千葉乗隆著
著者略歴。大正十年徳島県美馬郡美馬町に生まれる。竜大國史科卒、現在、帝谷大学文学部教授。本願寺史料研究所員、京都女子大講師。主要著書「中部山村社会の真宗」「仏教史概説日本編」「真宗教團の組織」「親鸞門徒の教団形成」「真宗禁教地域における特異講社」「真宗の道場と道場主」など。

に、この名を常に用いられた。

その愚禿の身にとって、唯一の解決の道は念佛と恩師から聞きとられた聖人はひたすら念佛の一途を歩み、戒行を保つことの出来ぬ人々、農民、庶民に同じられて、共々にこの道をたどられた。これらの念佛者は、聖人にとってはひとえに弥陀の御催しにあづかって念佛申す人々で、共に道を歩むお友達、御同行、御同行であった。だから「親鸞は弟子一人も持たず候」といつて、小慈小悲もなく、是非知らず、邪正もわかな愚禿の身として指導者ではないと表現された、そうした聖人の虚飾のない素顔そのままが描かれているのが鏡の御影である。

展観場には、鏡の御影のすぐ横に、聖人筆の六字名号がかけられている。これは名号本尊といわれる。名号を本尊として礼拝するのは、聖人独自の道である。普通、本尊といえば、仏の姿を木に彫刻したものとか、絵に描いたものである。

奈良とか京都の寺々には、木彫や絵画の古仏が本尊としてまつらされている。われわれは、これら仏像の前に立つたとき、まずその仏像のもつ美しさにうたれる。昔から人々は仏像のもつ美しさにうたれ、その美的トウスイを宗教的なものと錯覚した。聖人は木像、画像の仏たちが、人々を

歪曲したりしているとすれば、もはや教団としての機能を果していないことになる。さて現代社会において、一般に寺とか坊さんというと時代おくれの、前近代的存在であるという受うとり方をする場合が多い。聖人の教をうけつぐ教団に対する評価も同様である。

ところで、われわれが日本歴史をひもとくとき、飛鳥時代を代表する日本の文化遺産は何か、とすると、まず第一に法隆寺を擧げる。奈良時代はと云えば東大寺、平安時代は平等院といふように、ほとんどが寺院仏像等の仏教関係の物によつて占められている。それはそれの時代において、仏教が当時の社会において、その思想的指導者としての役割を果してきたからであった。

現代の社会において、仏教が前近代の遺物と目されるのは仏教団が現代社会に機能しなくなつたためである。それは神格化された親鸞像や、絵像、木像が真宗寺院に安置され、そのまま、鏡の御影や名号本尊を拝まれた聖人の真意が伝わらないためであるといえる。

幸にも最近、人間の原点に立つた愚禿親鸞の心にかえりうとする動きが高まつてゐることはほんとうによろこぶべきことである。私ははからずも一つの親鸞像を対比しながら、真宗教団は鏡の御影にたちかえるべきことをいたく感じたのであった。昭和四十八年七月、愛媛新聞掲載より。

詩的感情、美意識だけにとまり、宗教的境地までたかめ得ない実情をみて、「木像よりは絵像、絵像よりは名号」と、仏の名号を直接提示することにおいて、宗教の真面目を開闢せられたのであった。

蓮如上人は、その当初、聖人の遺志をうけつき、名号を本尊としていたが、教団が膨張するにしたがつて、信者の中には絵像の本尊を求める声が出て、やがて絵像の本尊を許すようになり、その後、木像の本尊も安置されるようになつた。教団の発展にともなつて、純粹に聖人の思想を守り通すことの出来ない状態が発生したためである。こうした状態は、教団内部にもその原因があり、また教団が一個の社会的勢力となると、社会的関連において生まれてくる場合もある。例えば、一向揆とか織田信長との十一年にわたる戦争とかを通じて、次第に教団は親鸞の思想から逸脱した方向を進むことになった。

元来、教団としては、開祖の信心を誤りないよう伝えすべき使命をなうものである。丁度それは薬を包むカプセルのようなもので、カプセルは薬を変質しないよう、患者に飲みやすいようにとの配慮からされたものである。そのカプセルが薬を変質させたり、患者の胃の中で溶解しないということがあればカプセルとしての役目を果していいことになる。真宗の教団が聖人の思想を傷けたり

法然聖人法語（三部經釈）

弥陀の本願の意は、かくの如くさとれと云うにはあらずただふかく信心をいたして称うる者をむかえんとなり。耆婆扁鵲（ぎばへんじやく）が万病をいやす薬は、もろもろの木、よろずの草をもて合葉せりといえども、病者これをさとりて、その葉木何分、その葉草何両和合せりとしらず然れども是を服するに万病ことごとく癒ゆるが如し。ただ恨むらくはこの薬を信せずして、我が病は極めて重し、いかがこの薬にては癒ゆる事あらんと疑いて服せんば、耆婆が医術も、扁鵲が秘方も空しくしてその益あるべからざるが如く、弥陀の名号もかくの如し。

それ煩惱悪業のやまい極めて重し、いかがこの名号を称えて生ることあらんと疑いてこれを信ぜずば、弥陀の誓願、釈尊の所説むなしくして、そのしるしあるべからず。ただ仰ぎて信すべし、良薬を得て服せずして死することなかれ。嵐山（こんろん）の山に行きて玉をとらずしてかえり、梅檀の林に入りて枝をよじずしていなば、後悔いかがせん。みずからよく思量すべし。云々。



念
仙

詩

抄

木村無相

風呂の桶二つは、火が止むる頃にはおひもの
の姓によらいさんと云ひます。

なにしてるの実見が少く、大変平文弱氣な

外國を除く日本のみが選ばれ叫んでゐる。お七草の詩のことは、日本風文化のうへて、歌風物

おじてゐるの間も同席する。

本多の心事は、おまかせだ。此の件は、おまかせだ。

蝉が鳴くかとさあ、ちて黙へ休むことは、蟬おもうほど

卷之三

卷之二

小さな手よ 深心あれ
内は。ふ。二〇日

新聞の三面

みてみると
みんなわたの

ことばかり

こんなに三面

にぎわせて
わたしが生きて

いるのかと 中 う
つぶやく ふふ

わが罪とかか
おもわれて

ナムアミダヅツ

ナムアミダヅツ

ナムアミダ

二ホロキ

ああ

木村無相

どうしても
もうせなかつた

身にしみて
しみじみもうす

夜半の静けさ
身にしみて
しみじみもうす

ナムアミダ

香樹院師仰せに

ああ

業で口がしぶって
念仏がもうされぬ

身のさちよ
悲喜こもごもに

自さめてみたら

ナムアミダ

歯をくいしばっていた

む 二 う か ら

夢の中でもお呼びかけ

砂をしぶつても

夢の中で

水は出ぬ

念仏さまに

わたしをしぶつても

チムアミダブツと

信は出ぬ

ひどく

真実信心

つきあたられた

むこうから

ハイツとこたえて

四七・九・一〇日

「たてまえ」と「ほんね」

花田正夫

たてまえとは、当然そうあるべき原則であり基盤となるもののことであり、ほんねとは、本心の底から出た音声である。

さて、理想と現実とよく言うし、私共はその矛盾に悩むことは誰しも経験することである。三十多年前に名古屋の公会堂で菊地、吉川、大仏というメンバーで文学者の講演会があった。その時、私の記憶に残ったのは、今は亡き大

佛次郎氏が「私は純文学を理想としているが、それでは生活が出来ないので、最近流行の通俗小説を書いて収入源としているが、やむを得ぬことと云いながらそれは堕落しているようでは落着かない」と理想と現実の矛盾の苦しみを訴えていたことであった。しかしその後十何年が後になつて「ようやく自分の書きたいことを書いてもどうにか生活が出来るようになった」と、その矛盾がほぐれはじめたことを喜んだ随想を書いていた。

こうした例はいたるところにあるが、理想が高ければ高

い程現実との矛盾の苦悩は増す。ところが理想そのものが人それぞれに高いもの低いもの、広いもの狭いもの、深いもの浅いものと千差万別である。

私のいうたてまえとは、理として当然そうあるべき標準であり基盤であつて、本来の正しい在り方というもので、ほんねとは、そのたてまえを鏡として、自分のかざらず、つづまず、素地のまんまの声で、実存哲学者の云うところに近いものである。そうした系統の人、ドイツのニイチエは「キリストの愛は生命を捨てて罪人を救つたが、自分は他人を殺しても自分が生きたい」と告白し、また「人間の外面はいかめしい殻で覆われた牡物（かき）のようであるが、中味はドロリとしたつかみどころのない得体の知れない存在である」と言い「こうした人間の経験し得る最大なもののは自分が自分を見下げはてることである」とも云つてゐる。これらはニイチエの理想とする超人の目に映つる人生の実体であつて、超人をたてまえとして、人間のほんね、

を語つたものである。

このたてまえの究極は、大円明鏡と称えられる仏の智慧の鏡である。親鸞聖人の御口からもれるほんねは、仏智に照らし出された御自身の素地そのままの声であることにただ驚歎の外はない。

自分の煩惱をまる出しをして、これが自分の赤裸々な姿である、自分の素地であるといつて放縱な生活、煩惱肯定の横着を是とすることではない。この傾向の人が落ち入り易いのは偽悪なる、偽善と真反対なあやまちである。聖人のほんねは、仏心をもととするたてまえの鏡に映る御自身の、それよりほがあり得ぬほんねである。御晩年の著書『愚禿鈔』の上下二巻のそれぞれの巻頭に、「賢者の信を聞いて、愚禿の心をあらわす

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり

愚禿の心は、内は愚にして外は賢なり」

とある。又これをくだけて、聖人の最後の御和讃に「よしあしの文字をしらぬひとはみな

まことのこころなりけるを、

以上、内賢にして外愚の賢者の信。

おおそらごとのかたちなり

る。ただこうした私の中に同座して下さつて、私のほんねを聖人が御自身の述懐として表白されるので「聖人様私もお言葉通りであります」と聖人の大信海に引き入れられる。仏智に照らし出されたところから仰言るほんね、そのドン底にあって、無碍の心光を聖人が渴仰されていることは何という徹底したありがたさであろうか。

聖人の信証されるほんねの前に、所謂の道徳者、賢善者は畏れおののき、いみきらうであろう。又理想の幻影にうかれる者は、悪魔の声とそじるであろう。しかし幾分でも自身の暗い影に驚ろき、行方のない闇路に悲泣する者は、このほんねに自己の正体を知らされ、徹到した仮の大慈大悲に雨涙せずにはいられない。

さて、たてまえとほんねを深く体感された聖人のお述懐「誠に知りぬ、悲しい哉、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚（じようしゆう）の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまず、恥ずべし、傷むべし」

は、全く人心の底をつかれての悲歎であり、柄（けた）はずれの無縁の大悲の讚仰である。

是非しらず邪正もわかぬこの身なり
小慈小悲もなけれども名利に人師をこのむなり

以上、内愚にして外賢の愚禿の心」とある。内が充実するものは外に頭を下げるのがたてまえであるが、聖人御自身は内がからっぽであるから外にかしこぶることしか出来ない、とほんねを告白している。

仏教大師最澄は「愚中の極愚、狂中の極狂云々、底下的最澄」と登山状に表白されている。一読して襟を正さしめられるが、それを鏡として私自身は、愚とも狂とも底下とも思えぬ、まことにしてみようのない身で、ただうなだれ愧じ入るばかりである。こうした聖賢の鏡によつて、本當の愚者の故に、賢しこぶることしか出来ない身がいよいよ知らされる。全く狂人に病識がなく、夢中夢を知らぬたぐいである。

このことはひとり賢愚だけでなしに、善惡、淨穢、苦樂、生死、真偽、是非、実假、等々の一切のことにおいてはまる鉄則である。凡夫の四顛倒と仏が指適されるところで、無常の世を常あるかに思い、何時か樂が来るときめて幾日河をたずねわび、われ淨しとなつて他の穢惡を責め、おれがおれがと煩惱の奴隸となつてゐることに気付き得ぬことは、私の毎日毎夜事毎にそうした妄見に終始してはてしない苦惱を繰り返している全体を云いあてられた言葉である。

又、たてまえとほんねについて真剣に悲歎したのが唯円房の歎異抄九章の不審であつた。すでに聖人に導かれて、闇夜に燈火を得たよろこびにおどりあがつたであろう唯円房が、その後歲月が経つにつれて、喜びのそとぼりが冷めて、色々と苦心してみたものの喜びがおこらぬにつけて、遂に聖人に心中のままを打明けておたずねした時、

「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけり。よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにていよいよ往生は一定と思いたまうべきなり云々」

と、唯円房の申し出をそのまま御自身のこととうけられて「よろこぶべきことをよろこばぬにて」と、たてまえとほんねをもつておこたえになつてゐる。

「よろこばなくともよい」のでは悪無碍の横着に墮し、煩惱肯定の放縱生活の邪道におちる。かと云つて「よろこばねばならぬ」の賢善者の教では、唯円房はもう救いの網は永遠に切れる。人として生れ、本願にあえたことは無上の喜びであるのに、よろこべない身、そうしたほんねに即答せられて、「よろこばぬにていよいよ往生は一定」と仰言する。しかもそれは聖人のひとりよがりでなく「煩惱具足の凡夫と仏がかねてしろしめして下さつての大悲大願」であるから「他力の悲願はかくの如きのわれらがためなりけり」と

知られて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と、仏智相応の大道を身をもつてお示し下さつている。

死を出るのをたて、まえとして、いずれの行もおよび難き悪人とほんねの上に他力を渴仰されている。

なお、このよろこぶよろこばぬについて連想するのは「淨行人は病を得てひとえにこれをよろこぶ」との法然上人（上）のお言葉である。蓮如上人もここを引用されて「自分にはよろこぶところがおこらぬ」と、淨土の行人としてのたてまえに照らしてほんねを述べられて、聖人のほんねに立つの鏡があつて映るもので、たてまえはほんねによつてその本願のたのもしさを隨喜していられる。

ここでよく注意せねばならぬことは、ほんねはたてまえの鏡があつて映るもので、たてまえはほんねによつてその本願のたのもしさを隨喜していられる。ほんねとたてまえは両々相待つてそこに真実の白道がひらける。たてまえだけでほんねが出ないと、きれいごとに終り、ほんねはたてまえのないところにはあらわれない、どちらが完全で、どちらが不完全というものではない。歎異抄をひもどいて心して読めば、たてまえとほんねが渾然と一体になつて隨所に語られている。

第三章の「煩惱具足のわかれはいづれの行にても生死をはなることあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、惡人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人もとも往生の正因なり」と、戒定慧の三學により生

以上聖人は、煩惱具足のわれらのすみすみまで、かねてしろしめす仏智の鏡の前に、御自身のほんねのありつけ打明けられて、その微塵のさきまで攝取不捨の大悲の御手をさしのべて下さることを讃仰せられている。この仏智に相應したほんねこそは老少善惡、男女貴賤のへだてなく、一度もそのほんねの声を聞くものは、やがて自身の眞実の姿を知らされ、やがて絶余曲折しながらもあらゆる河川が大海に注ぐように、聖人のほんねの世界に帰せしめられ、そのままに攝取の光明におさめられる。

禪家が「金風体露」というのは、秋がきて黃金色の紅葉が風に散つてしまい、はだか木があらわになるように、眞実の仏徳に一切の虚飾を払われて、ほんねの素地に立つて行くとき眞実の仏道のあることを教えられたものと思う。聖人はそのたしかさをほんねとして、念佛無碍の白道をするのである。

御自身に歩まれながら、私共のよき人と自然になつて下さるのである。

× × × ×

× × × ×

△たてまえ△

アホになれ アホにならずばこのたびの 淨土まいり

△ほんね△

アホにさえ なるすべしらぬこの身にて 淨土まいり

死を出るのをたて、まえとして、いずれの行もおよび難き悪人とほんねの上に他力を渴仰されている。

第四章には「今生いかにとおし不便（あびん）」と思うとも存知のごとくたすけがなければこの慈悲始終なし」とは、聖道の慈悲をたてまえとして、御自身のほんねを告げられている。

第五章に「親鸞は父母の孝養（きようよう）」のためとて一遍にても念仏もうしたこと「まだ候わづ」とは、孝養父母、奉仕師長をたてまえとして、御自身のどうしてみようのないほんねを悲しまれ、そこに淨土のさとりを仰がれている。

第十二章には「たとい自余（念仏以外の）」の教法はすぐれたりとも、みずからがためには器量およばざればつとめがたし」と、廢惡修善の教法をたてまえとして、器量およびがたく、つとめがたしとほんねを述べていられる。

第十三章には「兎の毛、羊の毛のさきにいる塵ばかりもつくる罪の宿業にあらずといふことなし」と、因果應報の鉄則の前に照らし出された御自身のほんねをきびしく仰せられ、また「さるべき業縁のもようせばいかなる振舞もすべし」と煩惱成就の身の縁次第でいかなる業さらしもする身であるとほんねを極限まで告げられている。

はうれしかりけり

△秋の彼岸に稿す△

つれづれ草

（二百三十五段）

ぬしある家には、すずろなる人、心のままに入りくることなし。あるしなきところには、道行く人みだりに立ち入り、狐、ふくろうようの物も、人げにせかれねば、所えがおに入りすみ、こだまなど云う、けしからぬかたちもあらわるものなり。

又、鏡には色かたちなき故に、よろずのかげ來りてうつる。鏡に色かたちあらましかば、うつらざらまし。

虚空よく物をいる。我等がこころに念々のほしきままに來りうかぶも、心というもののなきにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

全 上

（百七十二段）

ひとりともしげのものとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。

老いぬ人は、精神おとろえ、あわくおろそかにして、感じうごく所なし。心おのずからしらずかなれば、無益のわざをなさず。身をたすけて愁なく、人のわざらいなからんことをおもう。老いて智のわかき時にまされること、わかくしてかたちの老いたるにまされるが如し。

全 上
（十三段）

あとがき

九月号が印刷がおくれやつと十月一日に発送いたし、皆様に御心配おかけいたしました、おわび申上げます。さて十一月は池山先生の御忌月とて「仏と人」からこの稿を頂きました。月末の一道会のことをまだ誌すことは出来ませんが、今年は白井先生のお姿を挿し得ずなりまして、一入淋しい感がいたしますことで

近角先生の信仰書簡は、家庭問題に苦悶していらされた方に出自された御懇切なお言葉で、そのお方もこの書簡でふと明るみに出られたと伝聞いたします。み仏の大慈大悲心をほんとに苦しまる方の耳のはしにとどけたいとの念願があふれるものあります。榎原徳草さんの「仏と人」は、京都の高倉会館での講話であります。禅家であって、念佛に心のおさまりを獲られてすでに久しく、特によき人とのめぐり遭いを衷心から随喜していられます。盲龜が浮木に遭うと昔から譬えられますが、文字通りそのまであります。

二つの親鸞聖人像は、松山市での聖人宝物展で千葉乗隆さんが探く感銘せられ、現在の教団への反省を深くせられたものであります。私は千葉さんの御尊父と京都時代にお目にかかり、当時、徳島の寺へ二度も

おうかがいしたこともあります。乗隆さんはよきお父さんをお持ちになつたなあといつも羨しく思います。

木村さんは、福井県武生市瓜生町、太子園に九月はじめに移られ、身体の調子も割合によろしいとか、老いた者が老いに順応してむりのない自然の生活を続け、念佛のいきながかれと祈念しております。

先日、川端康成氏が非常にいとおしん

ハンセン氏病の北条民雄の「いのちの初夜」を角川文庫から求め再読し隨所に感銘

をうけました。十数年前読んだ時はその筋銘道だけを辿ったようでしたが、今度は可成

刻明に読みました。その中に、何度か自殺

をはかりながら死にきれいで、重患者の

病室で転々としている時、その室の先輩で

当番をしていた人から「僕がここへ来たの

は五年前です。その時の僕の気持、いやそ

れ以上の苦惱をあなたは味つていて。あ

んなの気持はよく解ります。しかしどこま

で行つても人生にはきっと抜け道があると

思うのです。……とにかく、頑病に成りき

ることが何より大切だと思います。大変無

慈悲な言葉が知れませんが、同情するより

は、あなたによいと思ひます。実際、同情

ほど愛情から遠いものはありませんから

ね。頬になりきつて、頬者の目がひらけ新

しい出発をしましよう云々」とある箇處

など、物も言えない今までに感動させられまし

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。南区駒上町二ノ八八。

○毎月二十四日、午前午后、昭和区小桜町教西寺、法話会。

市電、御器所通り下車。市バス北山下車

定価 半年 四〇〇円（送共）

一年 八〇〇円（送共）

編集・発行人 花田 正夫

電話八二一局七〇三七番

愛知県西加茂郡三好町大字福谷

印刷人 吉野 穂志郎

名古屋市南区駒上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番

郵便番号 四五七